

「フレンドシップ事業」によせて

弘前市教育委員会教育研究

所

所長 石岡 徹

弘前大学教育学部で教員を目指す学生たちが、直接子どもたちと触れ合う「フレンドシップ事業」は今年で4年目を迎えました。

今年は、学校適応指導教室での不登校児童生徒に対する「ふれあい支援活動」の他に、第三大成小学校で、学生の皆さんと小学生が「ふれあい体験活動」を行うなど、新しい事業も加わりました。

第三大成小学校での「ふれあい体験活動」では、学生の皆さんが思い思いに考えた「金魚すくい」、「紙飛行機作り」、「玉入れゲーム」などを、1、2年生の子どもたちと一緒に遊んだり楽しんだりして、学生にとっても子どもたちにとっても予想以上に心の躍る一日を過ごすことができたのではないのでしょうか。

学校適応指導教室での「ふれあい支援活動」では、6月に奥入瀬渓流を散策し、子どもたちは、学生の皆さんや指導員の方々に励まされながら雨の中を目標地点まで苦しみながらも歩き通し、達成感や連帯感を肌で感じとったようです。また、10月に実施された板柳町ふるさとセンターでの炊事遠足を通じて、調理することの楽しさや協力することの大切さを体感できたように思います。

現在、学校適応指導教室には、自分をうまく表現できずに個室にこもったり、元気に明るく振る舞っていながらも悩みを抱えているなど、さまざまな子どもたちが通級しています。そのような子どもたちに対して、学生の皆さんには、誠実な対応をして頂き心から感謝しています。実際に、子どもたちは学生の皆さんとの触れ合いを通して心を開いてくれたことが多く、行動面でも落ち着きがみられるようになりました。本当にありがとうございます。

学校適応指導教室での活動は、一人一人の子どもの抱える問題が深刻で複雑なために、その対応も難しいものがあります。学生の皆さんは、さまざまな子どもたちがいることを知るだけでなく、子どもたちとどのように向き合い、子どもたちにどのように対応したらいいのかなど、迷い、悩んだことでしょう。まさに教育の難しさを痛感し、教育を原点から問い直す1年間ではなかったかと思います。視点を変えますと、このことが学生の皆さんにとって、何よりも大きな収穫であったのかもしれない。

全国的に「ひきこもり」や「不登校」が社会問題としてクローズアップされている現在、「心の居場所」であり、「学校復帰のエネルギーを育てる」ことをねらいとしている適応指導教室にとって、「フレンドシップ事業」は大きな成果をもたらし、ありがたく継続してほしい事業であります。今後も弘前大学と市教育委員会が着実に連携を図りながら、「フレンドシップ事業」がより一層充実されることを願っております。